１．瀬戸内海における伝統行事

瀬戸内海は、昔から日本の政治、経済の中心であった奈良、京都に近いことなどから、様々な分野で先進的な地域として発展してきた。特に平安時代以降、京都が都と定められ、京都に住む貴族、役人、市民の生活を維持するために、京都より西に位置する瀬戸内海沿岸の各荘園において、温暖な気候を利用した農作物、塩などの特産物、魚介類等が生産され、瀬戸内海の海路、陸路を経由して都へ運搬されていた。

また、江戸時代には北前船を使用した西廻り航路の開発などにより、瀬戸内海は道としての機能が一層高まり、人と物資の輸送量が増加するとともに、海上交通の安全や大漁を祈願するために厳島神社や金刀比羅宮などの参拝や名所旧跡などを訪れる人々が増加し、瀬戸内海が大いに賑わうようになった。

そして現在でも瀬戸内海は、日本国内外を結ぶ物資や人の流れの重要なルートとなっており、道として大きな機能を担っている。

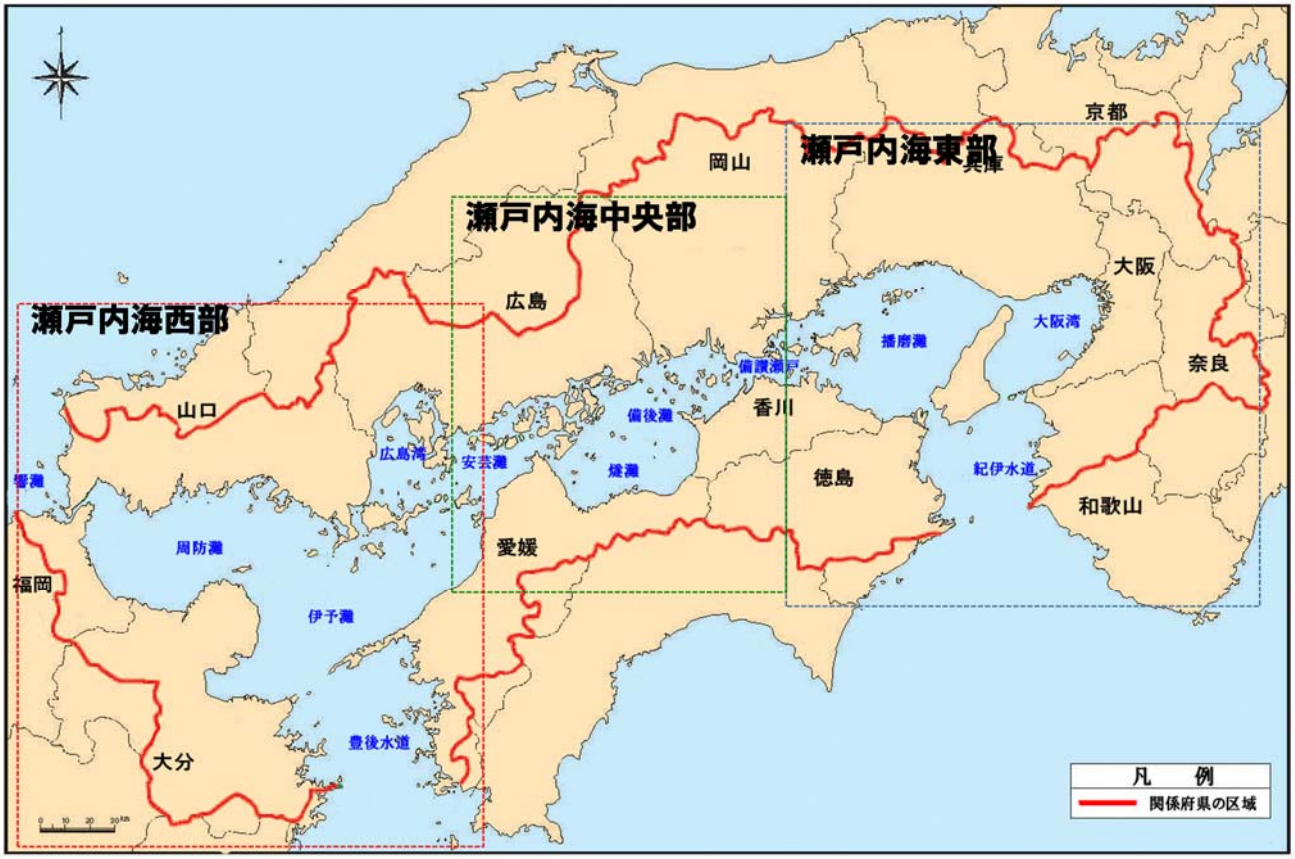
一方、瀬戸内海は昭和９年に雲仙、霧島とともに、わが国最初の国立公園として指定されており、家島諸島、備讃諸島、芸予諸島、防予諸島などの多島海美、鳴門海峡、来島海峡などの渦潮、慶野、津田、虹ケ浜などの白砂青松の自然景観や宝生院のシンパク（香川県）等の国の特別天然記念物が数多く存在している。また、スナメリ、アビ、カブトガニ、ナメクジウオ、アツケシソウ、ノジギク、ハママツナなど、他の海域に見られない珍しい動、植物が生息している。

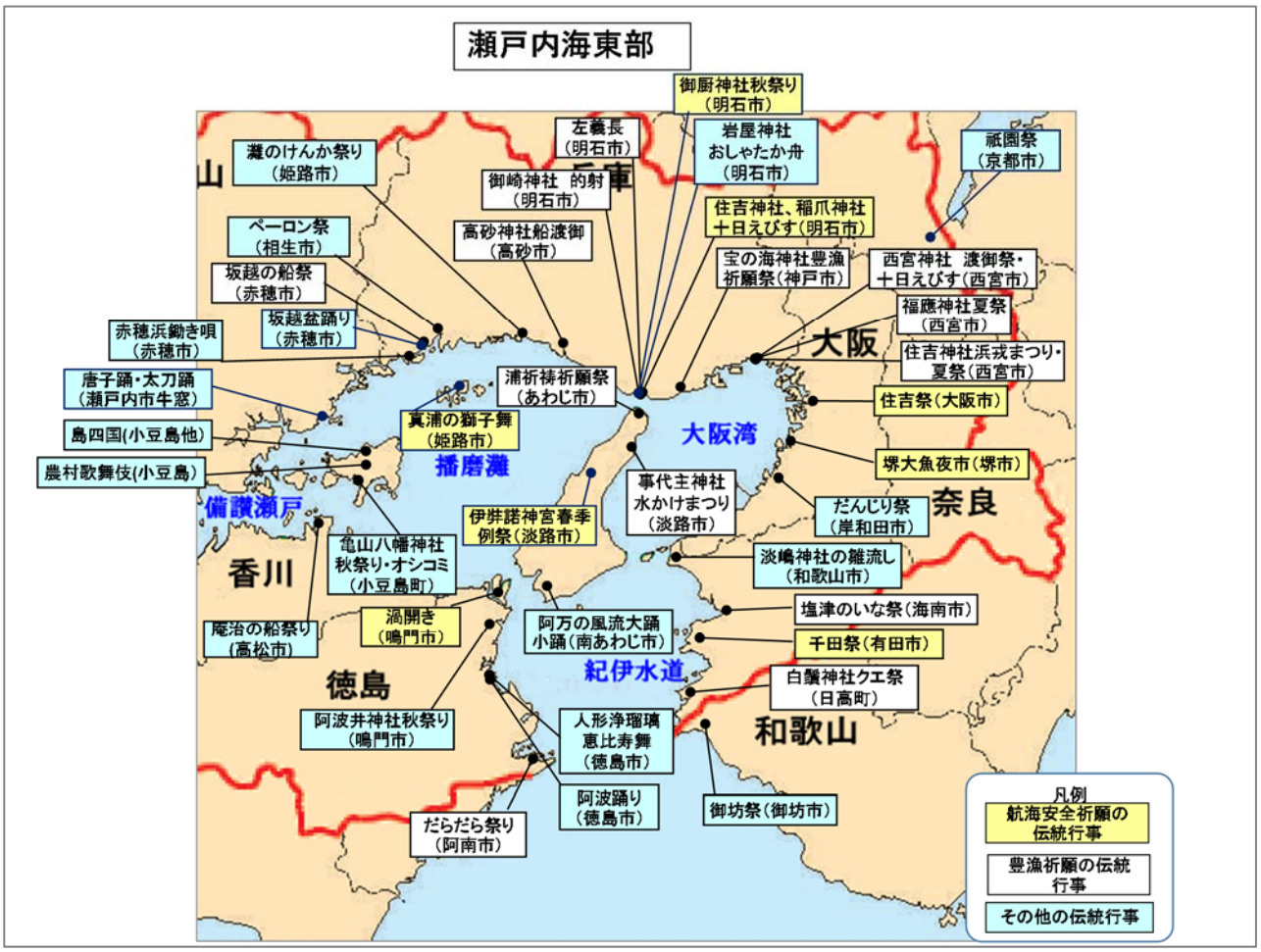
また、瀬戸内海の沿岸においては人の営みにより形成された人文景観も多く残されている。人文景観としては、宮島の厳島神社や、愛媛県宇和島市遊子町、広島県上蒲刈島、因島などの段々畑などがあげられる。瀬戸内海は、自然景観と人文的景観が組み合わされていることが、大きな特徴となっている。

このように、瀬戸内海では古くから漁業、農業、海運等の生活の場として活用されてきたことから、人の営みを受け継いできた数多くの伝統行事が伝わっており、例えば、火祭りや弓祈祷、管絃祭、舟競漕等、海に関係する珍しい行事や習慣が伝承されている。

以上のことから平成27年度の海文化事業は、瀬戸内海に伝わる様々な伝統行事の情報を湾・灘別に収集・整理し、もって瀬戸内海の海文化の啓発資料とすることとした。

瀬戸内海における地域ごとの主な伝統行事





瀬戸内海中央部

瀬戸内海西部